

マイトラヤニー・サンヒターにおける *átas* と *átra* の使用法

天 野 恭 子

0.1. Veda 語における代名詞起源の副詞 *átas*, *átra* はこれまで、近称の指示代名詞語幹 *a-* からの派生、すなわち *ayám / iyám / idám* のパラダイムに属すると考えられてきた：WACKERNAGEL, *AiG* III (1930), 512; MAYRHOFER, *EWAia* (1992-), s.v. *a-*²; BÖHTLINGK und ROTH, *PW* (1855-), s.v.; GRASSMANN, *Wörterbuch zum Rig-Veda* (1873), s.v. しかし上記文献には「ここから」等と並んで「あそこから」等の意味も挙げられており、必ずしも近称と言えない。一方 VIŚVA BANDHU ŚĀSTRĪ, *A Vedic Word Concordance, I Samhitās* (1942-) は、おそらく伝統文法の解釈に則り、*átas*, *átra* を代名詞 *etád* の項に挙げている。*átas*, *átra* の指示代名詞のシステム全体における位置を、明確にする必要があると思われる。

0.2. ここでは古 Veda 散文のうち最も古く重要な資料を提示する Maitrāyaṇī Samhitā を例に考察する。まず、同文献における指示代名詞を、文脈内での指示をするもの3つ、文脈ではなく話し手の存在する空間にあるものを指示するもの2つに分け、以下のようにまとめた。副詞的代名詞は、*tátas*, *tátra* が *sá-/tá-* に、*ítás*, *ihá* が *idám* に、*amútas*, *amútra* が *adás* に属することが知られているが、*ena-/a-* 及び *eśá-/etá-* には、語形的に対応する Abl./Lok. の副詞はない。

文脈内の指示	<i>sá-/tá-</i>	<i>ena-/a-</i>	<i>eśá-/etá-</i>
	<i>tátas</i> , <i>tátra</i>		
	話題の表面に現れて いるもの	文脈で前提とされて いるもの	話者と聞き手に共通に認 識されているもの
文脈外の指示 (空間的指示)		<i>ayám/iyám/idám</i>	<i>asáu/asáu/adás</i>
		<i>ítás</i> , <i>ihá</i>	<i>amútas</i> , <i>amútra</i>
		近称「ここにある」	遠称「あそこにある」

1. *átas* 全26例の使用法

1.1. ほとんどの場合、前の文脈に *átas* の指示するものが現れる。*átas* が祭式の場面で用いられるものや祭式のやり方を指し、文全体はそれを根拠付ける役割を

果たす例が典型的であり、その際根拠となるのは、多くは神話の出来事である：

(a) IV 4,5:55,14f. *viṣṇoḥ krámo 'si [...]* iti *rátham abhyā tiṣṭhaty. áto vái viṣṇur imāṃli lokān úd ajayat.* 『『お前は Viṣṇu の歩みである [...]]』と言って、戦車の上へと立つ。そこから Viṣṇu はこの [三] 界を勝ち取ったのだ。』；(b) IV 4,5:55,5f. *indrasya yónir asi, janáyéty. áto vá ádhíndro 'jāyata.* 『『お前は Indra の母胎である。産み出せ』』と (黒カモシカの角に唱えかける)。そこから Indra は生まれたのだ。』；(c) III 6,7:68,12ff. *tásmād dikṣitēna dikṣitavimitān nānṅtúbhiḥ krāmyam. eṣá hy étasya yónir. áto hy eṣó 'dhi prajāyate gárbho dikṣitás.* 「それ故に、潔斎をした [祭主] は、潔斎をした者のために設えられた [納屋] から、適切でない時機には出ていってはならない。例の [納屋] は例の者にとっての母胎であるから、そこから例の者は、[すなわち] 胎児である潔斎をした [祭主] は、誕生するから。」文脈内の指示でなく空間的指示を表わす例は 2 例見られる：(d) I 6,6 (2):95,16 *yád uttarató háred eṣó 'taḥ syád, ayám itás.* 「(祭火を) 北側を通して運ぶなら、例のもの (太陽) があちらに、ここにいる (祭主) がこちらになってしまうであろう。」；(e) I 9,5 (1):135,6f. *té vái svaryánto 'bruvann: áto no yūyāṃ prá yacchata. kénāyātanaen= átraivá vetsyatha=, ity abruvan.* 「天界に向かいながら彼ら (神々) は言った、『そこからお前達は私達に与えよ。』『何に拠って?』『そこに [お前達は] 見つかるだろう』と彼らは言った。」

1.2. *átas* 全 26 例の使用法のまとめ、*átas* の指すものの謂れを説明する文に関しては、例外なく Satzpartikel を含む (*vái* 13 例 (a), (b), *hí* 4 例 (c), *tú* 1 例) こと、謂れの説明が詩節や Mantra に関連する (5 例 (b)) ことも特徴的と言える。

[24 例] 文脈内での指示 (前方照応あり)

[23 例] *átas* は「実際の祭式で用いられるもの / 祭式でのやり方」を指す。

[18 例] *átas* を含む文：*átas* の指すものの謂れを説明する。

[12 例] Impf. ←(a), (b); [6 例] Präs./ 名詞文←(c)

[2 例] *átas* を含む文：祭式行為を述べる Präs., 文頭 *tásmād*

[2 例] *átas* を含む文：祭式行為の効果を述べる Präs.

[1 例] *átas* を含む文：間違った祭式行為を述べる Opt.

[1 例] は *átas* は「前に説明した事柄」を指す。

[2 例] 文脈外の指示 (空間的指示) ←(d), (e)

1.3. 各代名詞との接点と対比を考察するため、まず文脈内指示代名詞の 30 例ずつの用法を調べ、その典型的用法を明確にしたい。表に表わした以外の重要な特徴としては、*ena-/a-* に関しては 30 例中 22 例が祭主を指すこと、*eṣá-/etá-* については、すべての例が祭式そのものや祭式で用いるものを指し、30 例中 26 例はその指し示すものが直前の文脈に現れないことを指摘したい。

<i>sá-/tá-</i>	<i>ena-/á-</i>	<i>eṣá-/etá-</i>
[22] 祭式の謂れ説明	[29] 祭式行為の効果	[22] 祭式の謂れ説明 (+ <i>vái</i> [12])
[17] 神話の登場(人物)	[26] Präs., (+ <i>evá</i> [19])	[7] Impf. 神話
[14] Impf., (+ <i>vái</i> [5])	[2] Aor.	[8] Präs.
[3] 名詞文	[1] 名詞文 (finaler Dat.)	[7] 名詞文
[5] その他, Präs.+ <i>hi</i>	[1] 祭式の背景説明, Präs.	[4] 祭式行為の規定
[7] 祭式行為の効果		[3] 名詞文
Präs./ 名詞文, (+ <i>evá</i> [4])		[1] Präs.
[1] 祭式行為の規定, Präs.		[4] 祭式行為の効果, Präs.

1.3.1. 祭式の謂れを説明する *eṣá-/etá-* は、しばしばマントラに関連し、又 *vái* を含む同置文や Impf. 文に多く現れる：(f) III 7.7:84,16f. *súvān nábhrāḍ [...] ity. cté vái devānān somarākṣaya. etébhyo vá ádhi chándāmsi sómam āharan.* 『Suvāc よ. Nabhrāj よ. [...] よ (続く)』と [言う]. 例の者達が、神々にとっての Soma の番人なのだ。例の者達の許から韻律達は Soma を取ってきたのだ。」これらの特徴について、それぞれ上の *átas* の例(a)-(c) と比較できる。特に例(c)では、*eṣá-/etá-* と *átas* が同様の用いられ方をしている。

1.3.2. 例(d)では *átas* は、近称の *itás* と対照的に用いられており、空間的指示の用法が明らかである。例(e)では聞き手の空間に属するものを指示しているが、パラレルである KS IX 12:114,20f. では *amútahpradānād* 「あの [天界] から与えられたものに基づいて」と、遠称の代名詞で説明される。これは例えば日本語で、遠くにある「あの窓」を、その傍にいる人物に向かっては「その窓を開けて下さい」と言うのと同様、*átas* の中間的空間指示の機能を示すかもしれない。

2. *átra* 全 35 例の使用法

2.1. *átra* の指す語はほとんど前に現れず、今説明していることに該当する祭式の場面を指す：(g) III 7.2:76,6 *juṣāṇēnānyā ājyabhāgā ijjyánté, 'thátra ṛcóbhayáto yajati.* 「*juṣānā-*の語を用いて、他の (すなわち穀物祭における) パターの分け前は *Yājya* が唱えられるが、今この場面では (Agniṣtoma では) 両方とも、*Ṛc* を用いて *Yājya* を唱える。」*átha* との組み合わせで、祭式の普通のやり方の対比を表わす。上の *ijjyante* には対比のアクセントが置かれるが、他に Aor. と Präs. で「前はこうしたが、今ここではこうする」、*ná* を伴って「普通はしないが、ここではする」等の対比もみられる。一方 *ápi* と共に「(他の場合と同様) この場面において ... も」を意味する例も 5 例ある：(h) III 10.1:130,10 *agnir vái sárva devātā. átra vái śāpi devātā yásyā ālabhyáte.* 「Agni がすべての神格なのだ。[犠牲獣が] それのために捕らえられる、今この場合のその神格もなのだ。」

また, *yád evátra...* の組み合わせで関係文の中に現れる : (i) III 8,5:101,3ff. *yátra vá adò 'gnir hotrád išápākrāmat sá sarveṣu bhūteṣv avasad. [...]* *yát sambhārānt sambhārati./ yád evátrāg-nér nyaktam, tát sám bharati.* 「当時 Agni が Hotṛ 祭官の職から元気の素を持って逃げ出した時, その彼はすべての存在の下で夜を過ごした. [...] Sambhāra を集めるのは, 今現在まだ潜んでいる Agni の一部, それを集めているのだ.」ここでは *yátra...adás* (+ Impf.) 「当時 ... した時」と *yád...átra* 「今まだ ... している」が対比されていることがわかる. (→ 2.3.3.)

priyā- tanū- の語と共に現れ, 時々で姿を変える神々や祭式の「今のこの場面での」姿が述べられる : (j) III 6,5:66,6ff. *yajñō yád āgre vy ābhavat sá tredhā vyābhavat. [...]* *yā vá asya priyā tanūr āsīt táyā yájur asrayata=.* [...] *upāmsú yajuṣā. yajñasya hy átra priyā tanūṣ.* 「祭式が最初に分化したところのもの, それは三重に分化した. [...] その好きな姿であったもの, それで Yajuṣ へと寄りかかったのだ. [...] Yajuṣ によっては黙って [なされる]. ここでは [それが] 祭式の好きな姿であるから.」他に, *átra* が後続する *yátra* 文の Korrelativ である例 : (k) III 1,4:5,17f. *súg vá átra prajā ṛchati yátrāgniḥ khāyāte ciyāte vā.* 「ここで, [すなわち] Agni 火壇が掘られる, あるいは積まれるところで, 痛みが生き物達にぶつかる.」, 少数の例に前方照応が見つかる : (l) IV 5,1:63,16f. *āgnidhre sādasyaty. etád vá ānabhijitam. átho, átra hí tām rātriṃ devātā upavāsanti. [Āgnidhra に [水を] 据える. この例のものは, まだ陥落していないのだ. そしてまた, その夜の間神格達はそこで夜明かしをするから.]*

空間的指示は, 上の(e)で見た *átas* と共に用いられる例の他には, 次の l 例が見られる : (m) II 3,1 (4):27,13 *átrātra vái varuṇasya pāsās.* 「Varuṇa の罨はそこここにあるのだ.」

2.2. *átra* 全 35 例の使用法まとめ

[26 例] 「今ここで」(祭式における, 該当する場面を指す; 前方照応なし)

[7 例] 他のやり方との対比 (うち [5 例] *átha + átra*) ← (g)

[5 例] + *ápi* 前述の事柄に続けて (うち [3 例] + *devātā-*) ← (h)

[10 例] *yád evátra* ← (i); [4 例] + *priyā- tanū-* ← (j)

[3 例] 後方照応の関係文 *átra...yátra* ← (k)

[4 例] 前方照応: 祭式の場面に登場するものを指す ← (l)

[2 例] 文脈外の指示 (空間的指示) ← (m), (e)

átra を含む文の文脈における役割は, 祭式行為の謂れの説明が 16 例と, 最も多く, そのうちの 12 例が *vái* と共に用いられている.

2.3. 各代名詞との接点と対比

2.3.1. 今述べた *átra* を含む文の文脈における役割からは, *eṣá-/etá-* に準ずるように見える. 例(1)では *eṣá-/etá-* と *átra* が同様の用いられ方をしている.

2.3.2. 後方照応の関係文 *átra...yátra* では、*yátra* 文が祭式行為を、*átra* を含む主文が、その行為が行われることによって今起っていることを述べている。これに次の例が類似している (例(k)と比較せよ) : (n) I 6,7 (4) :97,17f. *etárhi khálu vá eśá sṛjyate yáryhy ádhīyáte*. 「この瞬間, [すなわち] (祭火が) 設置される瞬間, 知つてのとおり, 例のこの者が創り出されているのだ。」関係構文 *eśá-/etá-... yá-* は基本的にこの語順で現れ、*átra...yátra* はそれに準じていると考えられる。

2.3.3. 例(i)で *yád evātra* と *yátra...adás* (+ Impf.) との対比が見られた。関係詞と並んで「当時...したところのもの」を意味するのは、遠称代名詞の特徴的用法である : (o) I 11,9 (1) :170,13f. *yád evādaḥ páram annādyam ánavaruddhaṃ tásyaité 'varuddhyai gṛhyante*. 「当時獲得されなかったさらなる食糧, その獲得のためにこの例の (Atigrāhya 達) が汲まれる。」次の例と比較せよ : (p) III 2,5:23,2 *yád evātrāgnér nyáktam tásyávaruddhyai*. 「今ここでまだ潜んでいる Agni の一部, それを獲得するためである。」

2.3.4. *idám* に属する *ihá, itás* も「ここで」を意味するが、その際ほとんどが「この地上で」の意味と結びついている。又 *itás* には、指し示すジェスチャーを伴う用法がある (例(d)を参照)。しかし両語には *átra* に見られる「今この場面で」の意味はなく、これらの語が重ならず使い分けられていることが分かる。

3. *eśá-/etá-* と *ena-/a-* の機能再考 : (q) III 8,5:100,8f. *indraghośás tvā [...] pāntv ity. etaddevatyā vá imá díśo. yathādevatām evāinām práukṣit*. 「『Indra の轟音がお前を [...] 守れ』と。この[地上の] 諸方角は例の者達を神格にしている。それぞれの神格ごとにそれに水を撒いたことになる。」「例の者達」とは、ここに引用されている部分に続くマントラ全体 (I 2,8) に現れる神格達を指す。文脈の背景にある知識が前提とされており、この機能を『インド思想史研究』14 (2002), 25ff. において *anamnestisch* 「話し手と聞き手に共通に認識されているものを指す」と定義した。*enām* の指すものも文脈に現れないが、マントラ中の二人称 *tvā* が対象物である Uttaravedi の存在を示唆している。これは HIMMELMANN, *Deiktikon, Artikel, Nominalphrase* (1997), 94 の *anaphorisch-assoziativ* (連想の前方照応) 「先行する記述が、対象物の存在を予測できる枠組みを示す」機能に当る。上の *átas* の例(b)がこの *ena-/a-* の用法に準じることが、語源が示す通り、*átas* が本来 *ena-/a-* に属していた可能性を示す。*átra* の「今この場面で」の意味も、*ena-/a-* に準じた「該当する場面で」から説明され得るであろう。

〈キーワード〉 *Maitrāyaṇi Samhitā, átas, átra*, 代名詞

(フライブルグ大博士課程修了 Dr.des.)

Prof. Hojun Nagasaki as the chief. A new relationship between Orissa and Japan is expected to be explored from the research of this manuscript.

158. The Uses of *átas* and *átra* in the Maitrāyaṇī Saṃhitā

Kyoko AMANO

The Vedic pronominal adverbs *átas* and *átra* have often been assigned to the paradigm of *idám*, the pronoun of proximal deixis. It is not possible, however, always to understand them in the sense of ‘from here’ and ‘here’. The Vedic pronominal system is constituted by three pronouns of contextual reference (*sá-/tá*, *eṣá-/etá-*, *ena-/a-*) and two pronouns that refer to space (proximal *idám*, distal *adás*). The adverbs *tátas* and *tátra* belong to the paradigm of *sá-tá-*; *itás* and *iha* to that of *idám*; *amútas* and *amútra* to that of *adás*. But *eṣá-/etá-* and *ena-/a-* are without formally corresponding ablative and locative adverbs. On the other hand, *átas* and *átra* must have their proper place somewhere in the pronominal system.

A survey of all the 61 examples for *átas* (26) and *átra* (35) in the Maitrāyaṇī Saṃhitā has led to the following result: The sentences including *átas* and *átra* often play the same role as the sentences with the ‘anamnestic’ pronoun *eṣá-/etá-*. Typically, they give the reason of a contextually evident ritual act. In many *átra* examples (26 of 35), no preceding noun is found to which the adverb could refer, and a meaning ‘in this (ritual) situation (evident from the context)’ is strongly suggested. One example of *átas* refers to something that is not explicitly mentioned by a preceding noun, but can be understood from the context. This particular usage is reminiscent of the way in which *ena-/a-* is used. This usage will be discussed as a case of ‘anaphoric-associative’ reference.

159. On the Meaning of *sam-sarj/srj* in the Vedic Literature

Sunao KASAMATSU

Little attention has been paid to the meaning of *sam-sarj/srj* when the